

地域子育て支援拠点事業

実施のご案内

ひろば型

センター型

児童館型

ひろば・センター・児童館、
それぞれの機能を活かして、
子育て家庭を応援します。



はじめに

核家族化や地域のつながりの希薄化などにより、家族や地域の中で子育ての知恵や経験を共有することがむずかしく、子育てに周囲の手助けを求めにくくなっている状況があります。また、長時間労働等により父親の家事・育児への関わりが十分でない中で、子育てが孤立化し、負担感が大きくなっています。

家庭の中で子どもを育て、不安や悩みを相談することができず、一人で子育てを抱え込むことのないよう、親の就労の有無に関わらず、すべての子育て家庭を支える取組が必要となっています。

国では地域における子育て支援の充実を図る施策として、これまで、保育所等において育児不安について専門的な相談ができる地域子育て支援センター事業や子育て親子が気軽に集い、交流ができるつどいの広場事業により、子育て支援の拠点づくりを推進してきました。平成19年度からは、これらの事業とともに児童館の活用も図り、新たに地域子育て支援拠点事業（ひろば型、センター型、児童館型）として再編し、子育て家庭が歩いていける身近な場所に親子が集まって相談や交流ができるよう、すべての中学校区での設置（全国10,000か所）を目指して拡充を図っているところです。

利用者からは「子育てが不安だったが、同年代の親子と一緒に過ごす中で楽な気持ちになった」「子育てを助けてもらえる友人ができた」といった声が寄せられており、子育てを地域で支える取組として大きな役割を果たしています。

本ガイドは、自治体のみなさんが子育て支援の拠点整備を進める上で、また、これからこの事業に関わりたいと考えているみなさんの参考となるよう、立ち上げのきっかけや事業の内容・特徴について、全国各地の取組をまとめたものです。どの事例も、地域の実情に応じた、特色ある活動を行っており、子育て家庭にとって大きな存在となっていることが分かります。

本ガイドを子育て支援拠点の整備や、より効果的な事業の推進に役立てていただければ幸いです。



Contents

地域の子育て支援拠点の機能、役割、活動とは・・・ 3-4

● 「ひろば型」事業案内・・・ 5-10

● 「センター型」事業案内・・・ 11-16

● 「児童館型」事業案内・・・ 17-22

地域子育て支援拠点事業実施要綱・・・ 23-26



地域の子育て支援拠点の機能、役割、活動とは

渡辺顕一郎（日本福祉大学 教授）

家庭と地域の“架け橋”として

乳幼児期の育ちは、家庭を基盤としながら、成長に応じた子どもたち同士のかかわりや、世代を超えた様々な人たちとの交流を通して培われていきます。また、人格の基礎が形成されるこの時期に、親が子どもにしっかりと向き合い、豊かな子育てを行うことができるように、地域の支えを高めていくことも大切です。地域の子育て支援拠点とは、親子と地域を結びつける“架け橋”のような存在です。人と人がふれあう機会が減少し、子育て家庭の孤立が進む中、親子が気兼ねなく集い、つながりあうことのできる場が求められています。

求められる機能と役割

地域の子育て支援拠点は、すでに全国で4,000か所以上に達しています。ただし、個々の働きや活動をどこまで充実させることができるかは、まさに実施主体である市町村や、親子に直接かかわる支援者の努力と力量にかかっています。子育てをめぐる地域の課題を理解し、親子に寄り添うようにかかわる支援者の存在があって、はじめて実践が成り立ちます。子どもの遊具や絵本などが配された“場所”さえ提供すれば良いというわけではありません。地域の子育て支援拠点に求められる機能及び支援者の役割として、以下の3点を挙げることができます。

学び

支援者は、利用者が気兼ねなく相談できる関係をつくり、個々の親子への支援や情報提供などに応じること。また、利用者同士のかかわりあいや、地域の様々な人たちとの交流を促すようにも働きかけること。これらによって、親子がともに成長するための学びの機会を広げていくように努めること。

支え

支援者は利用者を分け隔てすることなく、誰にとっても身近な相談相手であり理解者であるように努めること。また、利用者同士の支えあいを促すとともに、世代や立場を超えた様々な人たちの協力を得て、地域全体として子育て家庭を支える環境づくりを行うこと。

親子の力を引き出す

支援者は、親子に備わる「成長する力」を信じること。とくに親に対しては、支えや学びを得て自己肯定感を高め、子どもや子育てに向き合う余裕を回復する過程を重視すること。そのために支援者は、成長を阻む要因の解決に努め、様々な活動を通して刺激や学び得る機会をつくりだし、親子の力を引き出すように働きかけていくこと。



実践例に共通する点

このガイドの実践例では、「ひろば型」「センター型」「児童館型」という分類にかかわらず、子ども同士や親同士を結びつけ、世代を超えたボランティアにも働きかけて、地域全体で子育てを支える取り組みが紹介されています。活動の写真から覗える親子の笑顔が印象的ですが、その陰には実施主体（市町村）と運営団体との協働や、支援者の弛まぬ努力があることを推察いただけたいと思います。少子化時代とはいえ、年間100万人以上の子どもが生まれれば、100万通りの子どもの育ちと子育てがあります。それぞれの子育て家庭の主体性を尊重し、子育て・子育ての伴走者として自らの実践や活動のあり方を見つめ直すために、実践例を参考にさせていただきたいと思います。

地域のネットワーク形成のために

地域の子育て支援拠点は、市町村直営、社会福祉法人、NPO法人への委託など、運営形態も多様です。さらに、保育所、児童館、市民活動といった成り立ちや背景も異なります。ただし、次世代を担う子どもたちを育み、より豊かな子育てを目指して人々が支えあう仕組みを、地域の中につくりだそうとする思いは共通しています。

子育て支援に取り組む団体が、専門性や立場を超えて、地域の中でともに手を携えていくことが大切です。地域に点在化している支援を面としてつなぎ、ネットワークを形成していくことが、子育てを地域で支えるためには不可欠です。地域の子育て支援拠点が、他の支援団体と協力して支援を行うことができるように、実施主体である市町村には数量的な事業評価だけでなく、支援の内容や質にしっかりと目を向けて、継続的に活動をバックアップしてほしいと願っています。